



アクティブ・ラーニング先進事例

—実施体制づくりから、授業の実際まで

最終回(まとめ)

アクティブラーナーと なるために



茨城県立 校長協会
並木中等教育学校 校長
全国高等学校 教育課程研究 委員長

中島 博司

アクティブ・ラーニングの目的再考

昨年3月の小学校・中学校に続き、今年度中には高等学校の新学習指導要領も公示される。そのなかで、すべての校種における「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング、以下AL）」の取り組みが求められている。

私は、校長となった2015年度からALについて研究をはじめた。16年度と17年度の2年間は、全国高等学校長協会の教育課程研究委員長として、ALなどに関する全国調査を実施し、その結果を全国研究協議会や「会

報」で発信してきた。さらに、近年は各地で研修会・講演会の講師を務め、ALを全国に広める努力をしている（写真1）。

ALの目的は「アクティブラーナー（能動的学習者）」を育成することだと考えている。そのためにも、ALは学校全体で推進することが理想である。なぜなら、大きく変化していく世の中においては、すべての児童・生徒が「アクティブラーナー」に成長し、柔軟に対応できる力を身につけることが最も大切だからである。

そのとき校長・教頭などのリーダーは、学校を先導する立場としてALについて学び、

「アクティブラーナー」に覚醒することが重要である。つまり、「学び続ける管理職」になることである。

「アクティブラーナー」になるには

私は、2015年8月に「アクティブラーナー」に覚醒したと思っている。そこにいたるまでに、多くのALに関する本や雑誌の記事を読んだり、他校種を含め、AL型授業を導入しているさまざまな学校を見学したりした。

そして、8月、東京で開催されていたAL関係の三つのセミナーに参加した。そこで、ある3人のプレゼンから刺激を受けたことよって、これまでの学びが結集した。その3人とは、藤原和博氏（奈良市立一条高等学校長）、小林昭文氏（産業能率大学教授）、羽根拓也氏（株式会社アクティブラーニング代表取締役社長）である。ALに関する知見とともに、プレゼン術も学ぶことができた。

なお、その後、私は「セミナーマニア」にもなり、今でも各種セミナーに足を運んでいる。教員の世界は、けっこう狭いと感じる。教育界だけでなく、ビジネス界の方々とも対話することで、学びの視野を広げることができるからである。

写真1 鹿児島県でのAL講演会



写真2 生徒向けのALセミナー



また、15年8月から、教員向けポータルサイト「Find! アクティブラーナー」を活用している。現在、約20万名の登録があり、1,700以上のコンテンツが掲載されている学びのプラットフォームである。各校種のAL授業動画がならび、木下晴弘氏、西川純氏、安河内哲也氏、出口汪氏など有名講師の講演会動画もある。本校は、学校で導入しており、全教員が全コンテンツをいつでも見ることができる。

さらに、16年9月から、Facebookを開設し、全国の「アクティブラーナー」たちとつながっている。その仲間からの情報で、有意義なセミナーを知り、参加することもある。また、本校を訪問してくれる方々か

ら、貴重な情報をもらうこともある。校長・教頭は、常にアンテナを高くして積極的に行動し、自分を磨くことが大切である。「アクティブラーナー」として「学び続ける管理職」の背中を見せることが、周りの先生方、児童・生徒たちの変容につながるものと考えている(写真2)。

自校に沿ったアクティブ・ラーニングを

「アクティブラーナー」として学んできた多くのALの理論と実践を自校に導入するうえでは、やはり各校の実態に沿ってデザインする必要があるが、まったく新しい取り組みを生み出すこともある(資料)。

2016年、私は独自の取り組みである

「AL指数」と「R80」を考案した。

「AL指数」とはALの実施率を示すもので、50分授業で、AL5分なら「AL10」、AL10分なら「AL20」となる。これは、自らの授業

を「メタ認知」する指標である。

「R80(読みはアールエイティー)」のRは、「Reflection(ふり返り)」と「Restructuring(再構築)」を表す。具体的には、授業の最後に内容をふり返って学びを再構築し、80字以内で書くというものである。必ず2文で書き、接続詞で結ぶことが特徴である。これは、「思考力・判断力・表現力」とともに「論理力」を育成することによって、ALを確かな学力向上につなげることを目指している。現在、全国各地の学校で「R80」を使っていたりしている。プロトタイプの用紙については、本校ホームページの「AL宝箱」に入っている。自由にご使用いただきたい。

なお、「AL指数」と「R80」については、本連載の第18回(『月刊教職研修2016年12月号』)のなかで詳しく書いたので、ご覧いただければ幸いである。

「AL指数」「R80」に続く「TO学習」の考案

2017年1月には、新しい取り組みとして「TO学習」を考案した。TOは「Teaching Others(ほかの人に教える)」の頭文字で、学年を越えた「縦割りのペアワーク・グループワーク」である。これは、ALを「深い学

写真3 高1が中1に漢文を教える



写真4 「あさイチ」取材風景



び」に深化させることを目的としたもので、実践を積み重ねている。

この「TO学習」を考案した理由の一つは、上級生に「自分のために学ぶ」だけでなく、「ほかの人のために学ぶ」ということを実感してもらいたかったからである。また、下級生は、先輩に教えてもらう喜びを感じているようである。さらに、この学習の準備段階で、他学年の先生同士が授業をデザインするという効果も出ている。「TO学習」を実施しているとき、生徒たちはとても「ニコニコ」している(写真3)。「学ぶ喜び」「教える喜び」を実感しているのであろう。また、見学している先生方もそれを見て「ニコニコ」している。

「アクティブラーナー」は幸せである！

最近のAL研修会・講演会では、AL導入のポイントとして、以下の五点をあげている。それは、

- ①ALが授業を変える
- ②ALが生徒を変える
- ③ALで学力向上
- ④そして、ALで先生方が変わる
- ⑤さらに、ALで幸せになる

最初に述べたとおり、ALの目的は、「アクティブラーナー(能動的学習者)」を育成することである。「アクティブラーナー」になると、毎日が明るく楽しく充実し「幸せ」になれると考えている。2018年1月10日、NHKの情報番組「あさイチ」の特集「子どもの授業が激変! 2018教育改革最前線」で、本校のALの取り組みが紹介

された。1時間以上の特集でALという言葉とその内容が、全国に発信された。番組中に2,000通以上のFAXが寄せられ、授業改善に対する視聴者の関心の高さがうかがえた。私のもとにも、大きな反響があり、とても「幸せ」な1日であった(写真4)。

*

本誌では、2015年7月号から「アクティブラーニング先進事例」という、このコーナーがはじまった。非常にタイムリーな連載で、多くの読者の先生方が、参考にされたことであろう。そして、約3年間の連載を経て、今回が一度の区切りと聞いている。

この3年間、全国の学校で授業改善が進んだと実感している。しかし、学びの改革はこれからが本番である。そのためにも、管理職はALの理論と実践を率先して学び、自校に沿ったALをデザインしていくことが求められる。私も「種まく人」として、もう少し走り続けようと思う。

20年後に日本の教育をふり返ったとき、「あの頃が分岐点だったな」と言われるであろうところに、今、私たちは立っている。これは、明治維新以来の改革かもしれない。そのような時期に教育に携われる「幸せ」を感じながら、一緒にがんばりましょう。

資料 学校としての取り組み／校長としての取り組み

茨城県立並木中等教育学校の取組

- つくば市にある開校10年目の中高一貫校。校是「Be a top learner !」
- 各年次4クラス(男女各80名)で、高い進学実績をあげています。
- 2015年度より全校でALに取り組んでいます。→ 2016年度より本格化！
- SSH, 県指定校として, AL・ICT教育・クロスカリキュラムの研究中です。
- 毎月1週間の「授業ちょっと見週間」(学習進路部担当)があります。
- 全教員が年間1回以上, 事前に登録して「AL授業」を公開します。
- 前期課程はAL50以上が普通。後期課程はAL20を目指しています。
- 2017年1月より「TO学習」にも取り組んでいます。
- 2018年1月10日にNHK「あさイチ」でALの取組が紹介されました。
- 生徒・先生方が「アクティブラーナー」として積極的に取り組んでいます。

校長としての取組

- ALについて, セミナー参加・書籍等により研究しています。
- 校長ミニ研修会(職員会議冒頭10分程度)で情報提供しています。
- 2016年5月に環境整備(「ALタイマー」「後方の電波時計」を全教室に設置)
- 2016年12月1日に「ラーニング・コモンズ」をオープン！
- 先生方に東京での「AL関係セミナー」への参加を推奨しています。
- 各地でAL研修会・講演会の講師をつとめています。
- 高校の授業改革は, ボトムアップで！
- 高校の校長は「種蒔く人」だと思っています。
- 学校ホームページに校長通信「並木ドリーム」を配信しています。